

参加学生名簿

氏名	所属学科	学年	所属研究室
小原 紀子	物理学科	D2	奥村研
仲野 朋子	化学科	D2	益田研
鄭 雲珠	情報科学科	D1	伊藤研
高屋 祥子	化学科	D1	相川研
増子 萌	情報科学科	D1	浅井研
姚 嵐	化学科	D1	鷹野研
川上 あゆみ	情報科学科	M2	椎尾研
小中 佳子	情報科学科	M2	瀬々研
対馬 かなえ	情報科学科	M2	浅井研
寺田 愛花	情報科学科	M2	瀬々研
中森 玲奈	情報科学科	M2	椎尾研
福崎 睦美	情報科学科	M2	瀬々研
松尾 光	物理学科	M2	曹研
宮崎 悦子	情報科学科	M2	小口研
森崎 千珠	化学科	M2	貞許研
綾 香苗	化学科	M1	山田研
伊澤 亜紀子	情報科学科	M1	瀬々研
落合 恵理香	情報科学科	M1	小林研
景山 瑞貴	化学科	M1	近藤研
國永 絵美	生物学科	M1	由良研
高島 麻里	化学科	M1	鷹野研
三木 香央理	情報科学科	M1	小口研
山田 恵	情報科学科	M1	瀬々研
吉田 悦子	化学科	M1	棚谷研

日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 小原 紀子

所 属(Affiliation): 理学専攻

(指導教員(supervisor): 奥村 剛 教授)

発 表(Presentation): Viscous imbibition of surfaces with a shallow texture comprising of pillars of low aspect ratio

今回このプログラムへの参加を決意したのは、英語で発表することにより自分の英語能力を向上させることができるのではないかと思ったからです。また、このような機会がなければ実際に国際学会などで発表するときに、自信をもって発表できないのではないかと思います、良い予行練習だと考えました。

今回の発表準備では、初めて研究内容を英訳しました。リハーサルでは、聴衆が様々な分野に渡っていたため、なるべく平易な単語を使用してわかりやすく説明できれば良かったのですが、残念ながら直訳するのが精一杯で、単語の選択まで配慮できませんでした。また、逆に他分野の発表も楽しく聞き取れれば良かったのではないかと思います。こちらも英語力やその他の基礎知識不足で理解することは困難でした。ただ、英語力が芳しくない私でも発表のときの定型句や「こんな時にはこう言う」的な表現を授業で教えていただき、とても心強かったです。また、これらを覚えるだけで英語表現が増えたことは、自分が成長した気になれ発表準備をしているときにはとても励みになりました。



シンポジウムでの発表は、上手に行えたとは言えない結果でしたが、私の場合、日本語でもあまり良い発表はできないので、こんな感じかなという印象です。発表内容がもう少し直感的にわかりやすいところまで推敲できていたら、もう少し違った発表ができたのではないかと思います。また、私はシンポジウムで座長を務めさせていただきました。座長を務めるとはじめて聞いたとき、ものすごく不安でした。そのため、担当セッション前までは事前準備で必死でしたが、定型句を読み上げるだけでなんとか無事に終了することができました。発表が時間通りに終わらなかったときや、質問者が発表者の回答に納得しているかどうか確認したいときなどへの対処は次回への課題となります。

発表を聞いていて印象的だったことは、梨花女子大学の学生さんは、ものすごく流暢に英語を話していたことでした。発表終了後の質疑応答は、日本の学生が考えながら単語を並べているのとはとても対照的に思えました。また、梨花女子大学の学生さんと話してみると、ほとんどの学生が日本語もとても上手に話していたことに驚きました。必要なコミュニケーションを取るために予め文章を考えてから必死で英語を話している私は、一体なにをやっているのだらうというような気分になりました。

今回の韓国でのシンポジウムや1ヶ月以上英語に奮闘した準備のおかげで、多少なりとも英語力は向上したと思います。しかし、英語でのプレゼンテーションの課題が多く残りました。英語を流暢に話せるだけでなく英語でのわかりやすい表現力を身につけることも重要に思いました。今回、シンポジウムに参加して自分がこれからどのように英語を使えるようになりたいかが明確になりました。このような機会をいただき、自分自身の能力とこれからの目標を確認でき、くわえて口頭発表での度胸がつけられたのはいい経験でした。またこのような機会があれば是非参加したいと思います。

発表のための準備は終わってしまいましたが、より良い英語プレゼンテーションができるように、また国を超えていろいろな人とコミュニケーションをとれるように、海外での国際会議への参加やポスドクでの在外研究を目指してこれからも精進していきたいと思います。

日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 仲野 朋子

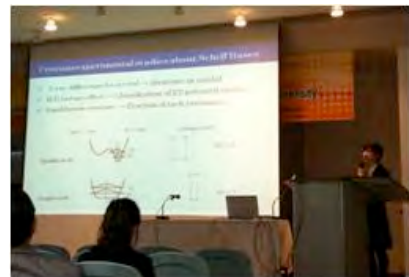
所 属(Affiliation): 理学専攻化学・生物化学領域 (指導教員(supervisor): 益田 祐一)

発 表(Presentation): Application of nuclear magnetic relaxation to elucidate proton transfer potential of $N \cdots H \cdots O$ type hydrogen bond

日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加させていただいた中で得たことのうち、以下2点、ご報告させていただきます。

第一に、本シンポジウム参加に向けて受講した授業(総合ライフサイエンス演習)を通して、他分野を専攻する人の前で、英語で自らの研究内容を話す機会を得られたことは、私にとって大変良い経験となりました。専門用語を並べたところで理解を得ることはできず、いかに簡潔かつ誤解のない表現をするか、ということの特に考える必要があったように思います。また、化学科以外の人でもイメージしやすい図式を作成したり、導入部分に視覚的にわかりやすい実験結果を挿入したりと、普段の学会とは違った視点で発表用資料の作成にあたる過程で、自らの研究内容を見つめ直す機会ともなりました。聴いている人の興味・関心を引き出すということに関しては、本シンポジウムの段階では未熟なところが多々あったと感じていますが、達成できなかった部分については今後の課題と捉え、改善していきたいと考えています。日頃から、たとえば英語で書かれた論文を読むという行為を、必要な手法や数値情報を得るだけでなく、1つでも多くの英語表現を自分のものとする機会にできたら、と思っています。

第二に、韓国の梨花女子大学での研究室ツアーや口頭発表の場において、同年代の学生の姿に刺激を受けました。研究会や学会等において、女性の研究者の数は圧倒的に少ないため、本シンポジウムのように同じフィールドにいる同性の学生が集まる機会は貴重です。懇親会では、世界を舞台にご活躍されている梨花女子大学のスタッフの女性の方とお話しさせていただく機会もあり、今後の進路について改めて考えるきっかけとなりました。



研究をおこなっていく上で、もちろん技術や知識も大切ですが、自分自身が何を思い考え、何をしていきたいのかを人に伝えるための言葉、言語能力の大切さを改めて感じた3ヶ月でした。英語での適切な表現、正しい発音・アクセント、全体を通しての話し方のメリハリ、そのすべてを頭で考えることなしに自然体でおこなうことは、3ヶ月のみで身につくものではありません。今回のことを踏まえて様々な経験を積む中で、別の機会にて英語での発表をおこなうときまでに、少しでも成長できたらと思っています。

最後になりましたが、日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加にあたりお世話になりましたすべての先生に感謝いたします。

日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

Name: Zheng Yunzhu

Affiliation: Humanities and Sciences, Computer Science (supervisor: Takayuki Itoh)

Presentation : ImageCube: An image browser featuring a multi-dimensional data visualization technique

I am proud to participate the symposium as a foreign student of Ochanomizu University. Thanks a lot for giving me this opportunity. This is the first time I participate in the international symposium. The trip for this symposium brought me a lot of impressions. And the most impressive thing was their wonderful presentations. Every girl showed their achievements of research. From the presentations, we could also know everyone do the research so seriously. I am deeply impressed that such great attention they have paid to the women's education! There is a proverb in China: Every man should stand on their feet of their own. But now women can do as well as men. Modern education allows women to develop our abilities freely. It provides a lot of ways so that women can also pursuit their dreams. It encourages us to persist our dreams and never give up. And never give up the life we dreamt of!

We visited advanced teaching facilities of Ewha Womans University. They told us that the government pays emphasis on women's education.

Their excellent results of research inspired me. I should work harder on my research so that I can present the better result on my research at the next meeting. As an information visualization technique, the final aim of my research is that it can be used and help people work efficiently. And I am making great effort on my research to help users to obtain qualitative visualization results to explore and analyze features and structures of multi-dimensional values assigned to images. I will present our new progress of my research at Hong Kong in March.

The only regret is that there aren't presentations of the students of computer technique of Ewha students. Therefore, We do not have much more communications with other students specialized in computer technique. Finally, I have to admit that my poor English was an obstacle, which influenced on my communication with Korean students. I have to work hard on my English.

日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 高屋 祥子

所 属(Affiliation): 理学専攻化学・生物化学コース(指導教員(supervisor): 相川 京子)

発表(Presentation): Annexin A5 inhibits blood coagulation via its carbohydrate recognition domains

今回のシンポジウムは、プレゼンテーション、質疑応答を全て英語で行う、という点において初めての経験であった。このシンポジウム参加を通して強く感じたことが二つある。

一つは「英語で“話す”かつ“聞く”能力を向上したい。」ということだ。このように感じた理由は、英語での質疑応答の難しさを実感したためである。口頭発表当日、私のプレゼンテーションに関して梨花大の先生が質問して下さったのだが、話される英語が早く、聞きとることに苦労した。更に、その質問に対して英語で適切に答えることにも四苦八苦した。結局、発表時間中に満足なやり取りができなかったため、休憩時間中にその先生に話しかけ、改めて説明し、ようやく私の答えに納得してもらうことができたのだ。

英語で口頭発表する機会が再度あれば、その時には今回よりも充実した質疑応答をしたいと思う。そのために、まずは基本である「英語で“話す”かつ“聞く”能力」を向上させたい。

海外旅行では、単語にジェスチャーを加えた“ニュアンス”が伝われば十分な会話で事足りていたため、前述のように感じることはあまりなかった。しかし、今回このシンポジウムに参加し、研究について“正確”に伝えるためには、今の英語力では不十分であることを身に染みて感じた。

したがって、これを機会に TOEIC の勉強を本格的に始めようと思う。また、梨花大の学生さんとメールアドレスの交換をしたため、SKYPE 等を利用して会話し、英会話能力を身につけたいと思う。

さて、二つ目は「多くの人に出会うことができてよかった。」ということである。多くの人、というのは梨花大の学生さんはもちろんのこと、日本女子大の学生さん、同じお茶大でも普段ならば発表を聞く機会もない情報科学コースや物理科学コースの学生さんである。

バンケットで出会った梨花大の学生さんは、「休みがなくて、大変です。」と言いながらも、研究について分かりやすく説明してくれた。その姿に、大変ながらも面白みを感じて研究に取り組んでいることが伺えた。「日本から離れたこの韓国で、私と同じように研究室生活を送り、努力している学生さんがいるのだ。」と感じ、親近感が湧くと共に「私も負けてはいられない。」といい刺激を受けることができた。

情報科学コースや物理科学コースの学生さんから、このような刺激を受けると同時に「情報や物理ではこんな研究をしていたのか。」と新たな発見をすることができた。特に情報科学の学生さんの研究内容は興味深いものが多く、例えばアンドロイドの研究をしている方の話は強く印象に残っている。

このシンポジウムに参加しなければ、彼女達に会うことはできなかった。そう考えると、参加してよかったと強く思う。またこのような機会があれば、是非参加したい。

日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 増子 萌

所 属(Affiliation): 理学専攻情報科学コース (指導教員(supervisor): 浅井 健一)

発 表 (Presentation): **The implementation method of shift/reset and the implementation in Caml Light system**

今回参加した授業、シンポジウムを通して得られた成果は、

- 英語発表が（あまり）苦にならなくなったこと
- さらに英語の勉強をしたい、というモチベーションを持てたこと
- 自分の研究内容を分かりやすく伝えるにはどうすればよいか、と考えるきっかけが持てたこと

です。

事前に参加したプレゼンテーションの授業では、簡単な自己紹介からはじまって順に長い発表練習に移行していったため、次第に英語での発表に対する抵抗をやわらげることが出来ました。ほかの人が発表しているときには質問を当てられることがあったので、自然と英語の発表を聞きながら質問を考える、という練習をすることになったのも、とても良い経験だったと思います。

授業は理学専攻とライフサイエンス専攻が対象だったので、自分の研究の発表内容を考えてときには、何を伝えたいか、どう話せば専門外の人であっても分かってもらえるだろうか、ということも考えさせられました。これは聴衆が同じ専門の人であっても重要な点で、自分の研究のポイントは何か、分かりやすく伝えるにはどうすればいいのか、というのは発表の際には念頭に置いておく必要があります。これまでも認識はしていましたが、改めて痛感し、研究について深く考えるきっかけになりました。

初めて英語での研究発表をしたときには、発表原稿を作成した上で、何度も練習してから本番に臨みました。練習の甲斐あって、発表自体は大過なく終わりましたが、質疑応答のときの質問やコメントが十分に聞き取れず、悔しい思いをしたことが印象に残っています。これは今回の授業・シンポジウムに参加した動機のひとつです。母語で発表するときと同じように、全体の流れを思い浮かべつつ、丸暗記したのではない発表が出来るようになりたい、と思っていました。今回の授業に参加したことで、少しではありますが、そのような練習が出来たと思います。

シンポジウム本番の口頭発表では、最初の発表者だったのでかなり緊張しましたが、大きなミスなく発表出来ました。質問は 1 つだけでしたが、質問内容を理解して答えられたので励みになりました。日本女子大学、梨花女子大学の発表者の内容は自分の専門分野とは少し離れていたもので、中身が十分には理解出来なかったのは残念でした。ポスター発表では、聞き手の理解度を推し量りながら説明することが出来ました。梨花女子大学の中を見学したときには、とても熱心に研究している様子が印象深く、自分自身も頑張らねば、という気持ちになりました。

今後の抱負は、

- 英語を勉強すること
- 分かりやすく発表出来るようになること
- 海外に飛び出せるような発表をすること

です。また今回のような催しがあるときには、参加しようと思いました。



日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 姚 嵐

所 属(Affiliation): 理学専攻 (指導教員(supervisor): 鷹野 景子)

発 表(Presentation): Entrapment of Amphiphilic Molecules into Surfaces of PVDF Membrane to Improve the Hydrophilicity



After I became a member of Ochanomizu University, everything seemed interesting to me, the new environment, the new teachers, the new classmates and so on. It was my great honor to attend the international symposium between Korea and Japan. I was also impressed by the beautiful campus and the unique European architectures in the campus of Ewha Womans University.

The opening ceremony was held in the afternoon on the day we arrived, which made me get known of the famous Ewha Womans University. We settled down in the student dormitory and two girls shared one room. My roommate was Yoshida-san. We chatted both in Japanese and English. In the daytime all of us were busy for PPT presentations and poster presentations. However, in the night, I got out of the campus to have dinner and do shopping with my new friend Zheng-san. The crowded streets, bustling shops and street vendors reminded me of my hometown. I got more familiar with the Japanese students during our 3 days communication.

I had learnt a lot from the English presentation class given by Dr. Okamura and Prof. Yura, and also the unforgettable trip in Ewha Womans University. Such activities could provide us a platform to show ourselves and make progress on English expression. The more chances we could have, the more self-confidence we would get.

For the girls who want to attend the 3 Women's University Symposium next year, there are some tips: 1. Seoul is much colder than Tokyo at this time of year; you'd better wear more clothes. 2. Ewha is built on a small mountain; you'd better wear comfortable shoes. 3. The student dormitory does not supply toilet paper and slippers; you'd better prepare them yourself. 4. Including the cost on accommodation, meals and native products, about 15,000 円 was appropriate.



日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 川上 あゆみ

所 属(Affiliation): 理学専攻情報科学コース (指導教員(supervisor): 椎尾 一郎)

発 表(Presentation): PotPet: pet-like flower pot robot

今回、日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加させていただき、多くの反省点を得ました。

まず第一に、英語について。梨花女子大学の学生の方々は、皆さん流暢に英語を話していました。学内を案内していただいた時も、きれいな発音(訛りが少なく、聞き取りやすい)で特に言葉に詰まることもなく話しており、翻って自分は日常会話も単語をつないで相手の理解力にかなり頼る形でどうにか成立させる有様。研究についても原稿を用意し、それを手元に置きながらでなければ発表できない状態でした。単純に勉強が足りないと感じています。相手の話す内容は博士前期課程に進学してから、かなり聞き取れるようになったと思っていたのですが、しかしながら、話すことに関しては機会が少ないことを言い訳に練習してこなかったのではないかと思います。来年は日本でシンポジウムを行うと聞きました。それまでに梨花女子大学の方にしていただいたように、学内を英語で案内することを目標に、勉強していきたいと考えています。



第二に、コミュニケーションについて。今回は交流のためのシンポジウムであったにもかかわらず、学生同士の交流がほとんど行えなかったという反省があります。情報科学系の学生が来ていなかったこと、英語に不安があったことも理由に挙げられますが、それ以上に、交流は相手に「関わろう」という気持ちがないと難しいのではないかと思います。今回は自分の発表や、海外での宿泊に手一杯になってしまって、それ以上のことをしようという気持ちがなかなか持てませんでした。日本での学会参加でも、自分の発表などで手一杯になってしまい、他の発表を聞いたり、それを元に話しかけたり、といったことができないことが多いです。今回の反省を元に、自分の発表だけでなく、周囲にもっと気を配ることを考えたいです。言葉や分野の壁を感じながらも、交流が行えるよう、余裕をもった発表準備をしてゆくことが大切だと感じました。

最後になりますが、今回のシンポジウムにあたり指導していただいた先生方、現地でお世話になった梨花女子大学の先生方、学生の方々に感謝します。ありがとうございました。

日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 小中 佳子

所属(Affiliation): 理学専攻情報科学コース (指導教員(supervisor): 瀬々 潤)

発表(Presentation): Gene duplication detection with frequent pattern analysis

今回のシンポジウムで、私はポスター発表のみの参加でした。海外に行ったこともなく、英語での発表をしたこともありません。外国の人と英語で会話することに苦手意識を持っていたので、外国で研究の交流をすることで苦手意識をなくすことを目標に今回のシンポジウムに申し込みしました。

まず初めにシンポジウムの事前準備として、2ページのアブストラクトの作成がありました。最初は日本語で文章を作成してからそれを英語に直すという作業をしましたが、出来上がった文章を読んでみるとあまりに冗長で、全く理解してもらえない文章になっていました。そこで私は作成した日本語から、要点だけを取り出してそこから英語で文章を作る作業を行いました。すると自分で客観的に読んで十分理解できるアブストラクトを作成することができました。今後英語の文章を作成するときに、今回の英語文章の作成が大変参考になると思います。



また、国の違う人と英語で会話することに不安があったので、ポスタースライドの説明のための英語の文章をしっかりと準備していき、英語で質問されてもしっかり受け答えができるような準備もしました。しかし、梨花女子大学の学生たちはほとんど日本のポスターのところに來てくださらず、韓国の学生同士の交流が垣間みられました。せっかくの交流会なので韓国の学生ともっとお話したいと思い、自分から韓国の学生のポスターのところに去了。韓国の学生は流量な英語で丁寧な説明してくださり、英語が苦手な私にもどのような研究をされているのか簡単ではありますが理解することができました。私からの質問も、時間はかかってしまいましたが最終的には相手に伝わるすることができました。英語が苦手でも、諦めないで相手に伝えようとすればちゃんと伝えることができるということを学びました。

口頭発表では、日本人の学生は一日中参加しているのに対し、韓国の学生は自分の発表前後のときだけ会場にいて、そうでないときは全く参加していませんでした。朝食や昼食は各自とることになっていましたので、一体いつ梨花女子大学の学生たちと交流するのかとても謎でした。唯一梨花女子大学の学生の方と食事をする機会があったのは二日目の夜食でしたが、席も自由だったので、自動的に同じ国同士で固まってしまっていました。そこで私は、近くに座っていた梨花女子大学の学生に色々話しかけて、英語で簡単な質問をしたり、文章にするのが難しいような質問は単語を繋げて伝えたりしました。すると、相手にちゃんと伝わるすることができました。また、梨花女子大学の学生からも質問してくださって、それに対してしっかりと答えることができました。お話の中で、韓国で日本のアニメやキャラクターがとても愛されていることを初めて知りました。大学や研究の話から私生活の話まで色々なことをお話することができ、外国の方と交流することの楽しみを得ることができました。

今回のシンポジウムを通じて、自分の英語力の低さを感じると同時に、英語で会話することの楽しみを感じることができ、苦手意識を克服することができました。また、梨花女子大学の学生たち全員が流暢に英語を話されていることに大変刺激されました。日本語を流暢に話す学生も何人かいて、梨花女子大学の学生は英語に限らず語学力がとても高いようです。他の国の言葉と話せることは、世界中の人と情報交換したり交流をしたりでき、とても重要なことであると改めて感じました。今後は自分で英会話の勉強をして、梨花女子大学の学生たちのように流暢な英語を話せるようになって、色々な国の人と交流していきたいと思います。

日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 対馬 かなえ

所 属(Affiliation): 理学専攻情報科学コース (指導教員(supervisor): 浅井 健一)

発 表(Presentation): The implementation of interactive type debugger in the Emacs and the improvement with the intended type

海外での発表は今回が二度目でしたが、前回とはまた違った貴重な体験を色々することが出来たと考えています。

今回のことを通して学び、得た成果としては、

- ・ 他分野への興味、他分野との交流の重要性の実感
- ・ 英語の重要性の実感
- ・ 海外の大学への興味

などがあります。

他分野への興味は、普段はあまり接する機会のない他学科の人や、他大学の他学科の人たちとの交流から生まれました。特に段階的に発表の量を増やして行った英語の授業で、どうしてそのような研究をしているのかという奥深い内容から、それをどう実現しているのか、という研究の核心部分まで、知る事が出来たことが興味をもった理由だと思います。また、他分野の方との交流で、思いがけない意見を頂く事もあり、普段はなかなか機会がないけれども、他分野の方々との交流は重要だと思いました。

英語の重要性は、発表や、海外の方との交流で実感しました。日本語なら簡単に言える表現でも、なかなか伝えることが出来ないため、もどかしい思いを感じていました。しかし同時に伝えたいという気持ちが大事であること、相手もきちんと理解しようとしてくれることを知る事が出来、英語をきちんと話せようになって研究についてもっと伝えたいと強く思いました。

大学キャンパスツアーなどで、梨花女子大学の研究者の方々の活躍を見たことで、海外の大学で研究することに実感が湧きました。

今後の抱負としては、

- ・ 他分野の方々と交流する
- ・ 英語を勉強して、研究について英語で話す機会を求め、海外に留学する

などがあります。

他分野の方々から頂く意見が貴重であったり、研究の内容を聞いていて全く違う発想をしていて参考になったり、など他分野の方との交流が、お互いに良い影響を与える事が分かりました。今後も交流出来る機会を大切にしていきたいと思います。

英語はあまり得意ではないので、今まではなかなか積極的に英語発表を希望してはいなかったのですが、今回の経験で伝えたいと思うようになりました。また、海外の方が進んでいる等の理由ではなく、研究者として独り立ちするために、海外でも経験をつみたいと強く思うようになりました。

日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 寺田 愛花

所 属(Affiliation): 理学専攻情報科学コース (指導教員(supervisor): 瀬々 潤)

発 表(Presentation): Global Network Alignment for Comparison of Protein Functions

今まで海外に行った事がなかった私にとって、今回の日韓3女子大学合同シンポジウムへの参加は、英語の研究発表と英語でコミュニケーションをした初めての経験であった。これらの経験と研究発表の練習を通して取得した英語のプレゼンテーションのスキルは、このシンポジウムで得られた大きな成果であり、私にとって今後に繋がる非常に貴重なものであろう。

今回のシンポジウムの研究発表で私が目標としていたことは、自分の研究に興味をもってもらうことであった。そのために、どうすれば自分の研究が伝わるか、ということ念頭に置き、スライドの作成や発表練習を行った。研究発表の準備をするときには、シンポジウムの参加者が事前に受講していた総合ライフサイエンス演習で教えていただいた、英語のプレゼンテーションで使われる表現やスライド作成の留意点、発表練習で頂いた発音やアクセントなどのアドバイスが非常に参考になった。この授業で教えていただいたことは、今後の英語のプレゼンテーションでも参考になるものであり、今回の派遣で得られた大きな成果の一つである。研究発表では、質疑応答の時間に二つの質問を頂いたが、これは研究が伝えられたということが実感できる、非常に嬉しいことであった。これは、頂いたアドバイスを参考にすることが大きいだろう。



シンポジウムでは研究発表以外に、バンケットなどの機会に学生とコミュニケーションする機会があった。このような機会に、私は積極的に英語で梨花女子大学の学生とコミュニケーションをした。会話は日本や韓国のテレビ、韓国のお土産、観光地など、研究と関わりが薄いものが多かった。しかし、これまで英語でコミュニケーションをしたことがほとんどない私には、この英語での会話は貴重な経験であった。この経験を通して、英語が得意ではなくても、伝えようとする意思があればコミュニケーションができる事が分かった。しかしその一方で、梨花女子大学の多くの学生が、英語でコミュニケーションすることに慣れていることに驚いた。中には、英語の他に日本語で会話が出来る学生もいた。今回、私が梨花女子大学の学生と交流できたことには、日本語を話せる学生が間を取り持ってくれたことも大きいだろう。母国語以外の言語も達者な梨花女子大学の学生とコミュニケーションすることで、日本語以外の言語、特に英語が話せることの利点をあらためて実感した。今回のような海外で開催されるシンポジウムでは、英語でのコミュニケーションが基本であり、英語ができなければ交流の機会が大幅に減るだろう。また、英語で行われている講演などは、私の英語の理解度が高い方が、より理解を深めることができるだろう。

今回のシンポジウムで行った研究発表やその練習、コミュニケーションを通して得られたことは、今後、海外で開催されるシンポジウムでも役立つであろう、非常に有益なものであった。得られたスキルはもちろんのこと、一度英語のプレゼンテーションやコミュニケーションを経験していることが、次の機会には自信になっているだろう。また、今回英語を使用したことは、私の英語の上達に繋がるとても良い機会であった。今後は英語を使用する機会を積極的に増やし、よりいっそう英語のスキルを向上させていき、同時に、多くの方とコミュニケーションをとっていきたいと考えている。

日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 中森 玲奈

所 属(Affiliation): 理学専攻情報科学コース(指導教員(supervisor): 椎尾 一郎)

発 表(Presentation): Neighbors' Shadow : Moderate Communication with Familiar Strangers

今回、日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加し、初めて英語での登壇発表を経験出来た。また、学内での他の専攻の学生たちや、実際に韓国の梨花大学に行き現地を知る事で、韓国を身近に感じられるようになった事が、大きな収穫であった。

まず、英語の発表に関して、準備の大変さと伝える事の難しさを感じた。私は以前、国際学会でデモ展示を行い、英語で研究を解説した経験があった。しかし、英語での登壇発表とデモでは、また違った、比べ物にならない程の準備が必要だと分かった。システムが目の前にない状態で、英語で話し、プレゼンのみで研究を伝える事の大変さや難しさを感じ、日本語での登壇発表以上に、何度も繰り返し英語で話して練習する事の大切さを実感した。



しかし、授業の段取りが良く出来ており、3分、5分、13分が2回(練習と本番練習)と、徐々に英語での発表練習時間を伸ばして行く過程で、なんとか大きな無理もなく、13分の登壇発表に達成する事が出来た。先生方の、適切でやさしいご指導に深く感謝する。

また、実際に梨花大学に行くと、梨花大学の学生達が登壇発表や研究室紹介などで、とても流暢に英語を話す姿を見て、英語力の差を感じた。登壇発表本番は、何とかこなせたものの、質疑応答で力不足を感じた。具体的には、質疑の英語を聞き間違え、間違えた回答をしてしまい、発表後に日本人の先生に聞く事で、初めて自分の間違いに気づいた。今後は、疑問に思った事はその場で聞き返したり、確認を取ったりと、もっと場慣れをしたい。そして、きちんと状況を説明したり、自分の思っている事を話せるようになりたいと感じた。このように、きちんとした英語の発表の場と、質疑応答の場を設けていただけた事は、大きな経験となった。今回、国際的に活躍できる人になる為に必要な力と、自分の今の実力との差が少しでも見えた事は、今後の目標ややる気に繋がると感じている。

次に、人を身近に感じられるようになった経験としては、特にお茶の水女子大学内の違う学科の学生達が上げられる。私は大学院から入り、すぐに研究室に所属し、自分の学科はもちろん、化学・物理など、他の学科の学生達とは全く接点がなかった。しかし、実際授業や韓国での発表を通し、様々な学科の学生と仲良くなる事ができ、とても有意義な時間を過ごす事が出来た。今後もこの繋がりを大切にしたい。また、韓国では、梨花大学の広さと設備の美しさや、梨花大学の学生の英語力の高さとの差を感じ、驚いた。しかし、キャンパス内で友達と楽し気に話す学生の姿を見ると、韓国の学生も大学も、日本の大学生と本質は変わらないのだなと思い、言葉の壁を超えて身近に感じる事が出来た。また、お昼や夜に、韓国の街を歩き、文化を肌で感じる事が出来た事も、大きな経験となった。

ただ、今回の現地での懇親会は、学校ごとに行動が分かれてしまい、研究室案内くらいしか梨花大学の学生達と喋る機会がなかったのも、もっと交流の機会を得たいと感じた。同じ空間にいても、日本人は研究室ツアー後に先に懇親会会場に入り、後から作業の終わった梨花大学の学生が席に付いたり、必然的に分かれて行動せざるを得ない場面が多々あった。また、ポスター発表に明確な客もおらず、参加者全員がポスター前に立つようになっていた為、互いの発表を知る良い循環が無かった。ただ発表する以外にも交流のきっかけを場面ごとに用意しておくような、今後の日韓3女子大学交流合同シンポジウムでの改善を期待したい。

日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 福崎 睦美

所属(Affiliation): 理学専攻情報科学コース (指導教員(supervisor): 瀬々 潤)

発表 (Presentation) : Design of comparative transcriptome microarray with experimentally determined sequence distance

今回のシンポジウムは、初めて他国の学生と積極的に交流することのできる良い機会だった。以前に国際学会で英語での研究発表をした経験があったが、その時は初めての英語でのプレゼンテーションの準備に追われ、また、学生の発表者が少なかったこともあり、交流を楽しむことができなかった。今回は、事前に英語のプレゼンテーションの授業を受けていたことで十分に準備ができ、また、英語で質問されるに慣れることも



できたため、落ち着いて発表を行うことができた。さらに、授業で他の受講者の研究発表を多く英語で聞いたため、英語でのプレゼンテーションを聞くことにある程度慣れることができた。そのため、梨花女子大学や日本女子大学の学生の発表も理解しやすくなったのではないと思う。本大学の学生の研究についても、研究室が違えば同じ専攻内でもほとんどの学生の研究内容は知る機会がなく、専攻が違えばどのような研究が必要とされ、どのような実験や解析がなされているのか全くわからなかった。そのため、英語の授業でもはじめは全く研究内容を理解することができなかったが、授業で何度も発表練習を聞き、少しずつ他分野の研究も理解できるようになってきた。それにより、これまではほぼ生物系のデータについてのみ解析を行ってきたが、他のいろいろな種類のデータで適用されているデータマイニングの手法についても興味を湧いた。いろいろなデータが解析されていることを知ったことで、これまで自分の行ってきたバイオインフォマティクス向けのデータマイニングの手法が、もっと他の分野に応用できないかを考えることができるきっかけにもなった。

口頭発表では、生物系とセッションが分かれてしまったこともあり、自分が興味のある生物系の発表を聞くことができなかった。そのため、ポスター発表があったことはとても有意義だったと思う。口頭発表では聞きづらい初歩的な質問にも、理解できるまで答えてもらえるので、興味はあっても詳しくわからないような分野の発表を理解することもできて嬉しかった。梨花女子大学生のポスターを聞いたときにも、こちらが理解できていないのを察してジェスチャーを交えたり専門用語をより分かりやすく説明したりして頂けたので理解しやすかった。ポスターセッションの時間は1時間半と短かったので、たくさんの発表を詳しく聞くことはできなかったが、アブストラクトを読んで興味を持った研究の概要を知ることができて良かった。

今回のシンポジウムと事前の英語の授業を通じて、特に自分には英語のリスニング能力が足りていないことを痛感した。また、韓国の学生の中に、日本語が堪能な方が思った以上に多かったことに驚いた。韓国の、語学や国際交流についての関心の高さを感じ、見習っていかなければならないと感じた。さらに、これは英語での発表に限ったことではないが、自分の発表がセッションの参加者の方々に理解されづらい内容になってしまったことが反省点である。生物系ではなく数学・情報系のセッションでの発表だったのにも関わらず、どちらかと言えば生物系の方々に理解されやすい発表の仕方になってしまった。生物系と情報系の中間分野での研究なので、もっと情報系に理解されやすいアプローチの仕方があったはずなのに、そのような対応ができなかったことは、今後日本国内での研究発表時にも気をつけるべきことである。今後は発表したことだけに満足するようなやり方ではなく、より聞いてくださっている方々に理解してもらえる発表の仕方を考えてプレゼンテーションを行っていきたいと思う。

日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 松尾 光

所 属(Affiliation): 理学専攻 物理科学コース (指導教員(supervisor): 曹 基哲)

発 表(Presentation): Leptonic decays of D_s and B^+ mesons in the supersymmetric standard model with R-parity violating interactions

大学が主催する海外への派遣プログラムへの参加や英語のプレゼン発表と、私にとっては全てが初めての貴重な体験であり、与えられた英語のプレゼン発表の課題、ポスターの課題、毎回の授業で与えられる課題をこなすことは、英語が苦手な今まで英語を話すのをなるべく避けてきた自分には一苦勞でした。特に、授業で与えられる課題については様々な用途、様々な時間での柔軟なプレゼン課題が課せられたため、とてもいい訓練となりました。英語を学ぶ方法は人それぞれだと思いますが、この授業で私は、英文をひたすら暗記することに最も時間を費やしました。



最初は英語の発音にも慣れず、スムーズに音読するのにも苦勞をしましたが、その後口が覚え、頭が覚えていくうちに、イントネーションやアクセントに気が回るようになり、自分が今英語で何を話しているのか理解できて、ある程度丸暗記でなくとも話の流れが崩れることなくトークを進めることができるようになりました。授業の担当教員である岡村先生から英語での会話が通じるコツや、英語だけでなく、効果的なプレゼンの仕方についてなど、色々なお話が聞けたのもいい経験でした。

実際シンポジウムに参加して印象的だったのは、梨花女子大学の方と日本の派遣学生との英語による会話力の違いです。日本の派遣学生は言うまでもなく、英語の授業・リハーサルによる訓練を重ねてプレゼンに挑んだため、発表自体は皆すばらしいものでした。しかし、質疑応答となるとなかなか単語がでてこず、苦勞している様子が見受けられました。自分自身も質疑応答で満足のいく議論をすることができず、悔しい思いをしました。一方で、梨花女子大学の学生さんは英語で話すことに慣れているように感じました。発表自体は暗記ではなく、考えながら言葉を発していて、質疑応答もすらすらと答えているように感じました。また、英語に限らず、Laboratory tour で物理の実験室を梨花女子大学の学生さんに案内していただいた際に、「何か聞きたい事があれば日本語でも大丈夫です」と日本語で言っていただき、とても驚きました。また、私自身の経験ではありませんが、日本から一緒に参加した派遣学生の友人から「昨日話した梨花女子大学の学生さんは、日本語を6ヶ月ほど勉強したって、すらすら日本語で言っていたよ」という話を聞き、梨花女子大学の学生さんの外国語に対する意識の強さを強く感じ、また同時に自分自身の意識の低さも強く感じました。今回のシンポジウムの目的は、専門的分野の学習ではなく、どちらかという和交流を目的としたものでしたが、このような交流プロジェクトに参加する機会は初めてだったので、コミュニケーション手段としての英語の重要性を強く認識しました。このシンポジウムの一連のプロジェクトに参加したことで、はっきり言って、今回の経験でとっさに英語での受け答えができるまでに成長したとは思いますが、しかし、普段から英語を積極的に話すよう心がけたいという、語学に対する意識が非常に高まり、今後、国境の枠にとらわれず色々な場面で挑戦していきたいと強く感じました。

日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 宮崎 悦子

所 属(Affiliation): 理学専攻情報科学コース (指導教員(supervisor): 小口 正人)

発 表(Presentation): Evaluation of Bandwidth Aggregation Middleware using Multiple Interfaces on Wireless Communication

一番驚いたのは梨花女子大学校の学生はとてよく勉強しているということです。プレゼンテーションやポスター発表の内容もとてもよく練られているし、説明の仕方もとても丁寧で専門外の聴衆にも理解しやすいように分かりやすく発表していました。そしてなにより英語がとても堪能だということが一番驚いた点です。発音も聞き取りやすく、質疑応答でも的確に流暢な英語で受け答えしている姿を見て、彼女たちは本当に同年代の学生なんだろうかと感心しました。「韓国人は日本人と同じくらい英語ができない」ということをどこかで聞いたことがあった私は、正直に言うところの意味で油断していたのだと思います。英語は第一言語ではないしお互いの意志疎通に壁が存在するのは仕方ないことだと諦めていたのです。でも実際は壁があるのは私の方だけで、梨花の学生さんは本当に明るく、積極的に取り組んでいました。



印象に残っているのが最終日のポスターセッションで、物理を専攻している学生にポスターの説明をしてもらった時です。自分の専門が情報であると伝えると、専門的な言葉を避けて、代わりに簡単な単語や言い回しをたくさん使ってわかりやすく内容を伝えてくれました。最後に学年を聞くとなんと今は学部生で、1 セメスターくらいの期間をかけてこれだけの研究を完成させたと言うのです。私から見ると修論発表でも使えそうだと思うくらい内容が濃いものだったのでとても驚きました。授業などが忙しい中、その合間をぬって実験などをしたのでしょうか。次に私のポスターも見たいということで説明しましたが、準備不足だったこともあり、彼女が話してくれた時とは比べ物にならないくらいまったくうまく説明することができませんでした。自分のふがいなさを悔やむとともに、それでも梨花の学生さんたちは興味を持ってくれ、いくつか質問もしてくれたので自分の今後の発表について考える上でもとても参考になりました。

化学や生物など、情報以外の理学の分野に属する発表なども聞いて改めて感じたのは、自分の専門分野以外の語彙も最低限のものは知っていなければならないということです。わからない単語があり、説明してもらおうとき「これは〇〇の一種です」と言われても、その〇〇もわからないということが何度かありました。それもわからないとは言いつらく、かと言ってわからないままだと発表の内容がつかめないのも再び尋ねることもありましたが、そうなるとうちやよりに巡りで、話す方はもちろん聞く方も大変な労力を使います。今後自分の研究や、専門分野を深めていくうえでも、幅広い視野を持ち、科学に属するあらゆる分野での最新技術を追求することはとても重要です。そのための基礎的な知識として今後はまずボキャブラリーを増やしていきたいと思いました。

そのほかに圧倒されたのは大学構内の設備についてです。梨花女子大学校は女子大学としては世界一の規模を誇る総合大学で、学生数も多く、敷地も広大なのが特徴ですが、キャンパス内の複合施設にはレストラン、書店、コンビニのみならず劇場や映画館、さらには本格的なフィットネスジムなども備えてあるのを見学させていただきました。地下鉄の駅からは徒歩5分ほどの立地に加えて、地下駐車場も完備されているので快適な学生生活を送るための環境がすべて整っています。ジェンダーやダイバーシティの観点から世界的にも見直しが進められている女子大学が、今後も存在意義を持ち続けるための先駆者として本学と共に時代を切り開く役割を果たしていくのだろうと感じました。

日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 森崎 千珠

所属(Affiliation): 理学専攻生物・化学コース (指導教員(supervisor): 貞許 礼子)

発表(Presentation): A Biochemical Approach to an in vivo Bacteria Imaging bacterial imaging technique based on bacterial surface engineering

私はこれまで学会で発表する機会があったが、英語で口頭発表したことはなかった。本シンポジウムに派遣されることになり、英語で口頭発表する機会をいただいたので報告する。

発表をするにあたって、英語のプレゼンテーションのための講義を受講した。この講義を受講することにより、普段滅多に聞けない化学・生物化学コース以外の学生の専門の話が聞けたことがまず収穫であったと思う。講義では、1 分間スピーチ(簡単な自己紹介)、3 分間スピーチ(自己紹介やポスター発表で行うような簡単な研究内容紹介)、10 分間スピーチ(本番を想定した口頭発表の練習)を行うなど英語を話す分量は内容が進むにつれて多くなっていった。そのための準備は発表も英語も苦手な私にとっては非常に大変なものであった。私が講義中に行った英語スピーチで特に注意されたのはアクセントが弱いことだった。これは、3分間のスピーチをしても10分間のスピーチをしても注意された。これは、講義でのスピーチの前に自分で何度かアクセントを意識した練習をしても、実際に人前に立って話してみると緊張のためかアクセントがいつの間にか消えて、単調な話し方になってしまったことが原因であったと考えられる。よって私は、指導教員の指導のもと、大事な単語のアクセントの矯正を行った。また、話す内容も実験結果は最小限に絞り、なるべく背景を丁寧に説明することで、専門外の人にこの研究の重要性や面白さを理解してもらえるように作った。また、私の英語がうまく通じなかったときのために、スライドだけで私の話が分かるようにスライドに載せる言葉も選んだつもりである。発表する原稿が完成したら、1 日 5 回は声に出して練習するように心がけた。

梨花女子大学の発表会場は、私が思った以上に広かった。その広さに緊張してしまったのか、発表では、覚えてきたはずの原稿が頭のなかで再構成することができず、原稿を見ながら途中で詰まりながら話すことになってしまった。原稿を見ながら行っていたが、観客の表情を見ながら発表することを心がけたので、発表については最低限のことができたと思っている。しかし、質問ができなかったことが大きな心残りである。質問できそうな場面、質問をした方がよかった場面など質問するチャンスは多々あった。それでも、自分の英語に自信がなかったから質問をすることができなかった。今思えば英語に自信がなくても、単語をつなげるだけで質問内容は伝わるような気がする。文法的に正しい英語を話すことよりも、積極的に質問を出して発表者とコミュニケーションを取ろうとする姿勢の方がより大切であると思った。

今回の派遣を通じて、まず英語で話す勇気がとても大事であることを痛感した。梨花女子大学の学生は皆、流暢な英語を話していたので後ろ向きになってしまった部分もあったが、それでもとにかく口を開かないことには何も始まらないことがわかった。これまでは覚えている英語の語彙が少ないから英語が話せないと思っていたが、それよりも英語が下手だから話そうとしなかった態度の方が問題であることに気づいた。覚えている語彙が多ければそれだけ多くの事柄を伝えられることは事実であるが、それは後から勉強すれば恐らくさほど問題はない。しかし、話そうとしない態度だけではどうすることもできない。よって今後は、英語ができないからと後ろに下がるのではなく、できないからこそ機会を見つけて積極的に話すように心がけていきたい。最後となってしまったが、このような素晴らしい機会をくださった実行委員会の先生方に感謝をし、報告書の結びとする。



日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name) : Kanae Aya

所 属(Affiliation): Division of Chemistry and Biochemistry

指導教員(supervisor) : Shinji Yamada

発 表(Presentation) : Stereoselective [2+2]photocycloaddition
of 1-Pyridyl-4-Phenylbutadienes using cation- π interaction

これからの社会は、どんどん国際化していくのは目に見えていて、私自身、将来的には海外で働くこともあるのではないかと考えています。

今回の日韓3女子大学交流シンポジウムでは、自分の研究を発表するいい機会なのではないか、英語を話す能力が身につくのではないかと思い応募いたしました。

授業では、英語での説明(プレゼンテーション方法)の他、人をひきつけるためのプレゼンテーションの方法、わかりやすい説明、スライドの作り方について学ぶことができました。いままで、そういったことをあまり意識したことがなかったので、とても勉強になりました。

また化学科だけではなく、情報科など他の学科の人の研究発表を聞くことにより、他の分野への興味・関心が高まり、視野が広がりました。この授業を通して英語能力だけでなく、たくさんの能力が身につきました。

人前でプレゼンをするという機会は普段ほとんどないので、授業やリハーサル等での発表は貴重な経験となりました。わかりやすく正確に伝えよう、人に興味をもってもらうにはどうすればいいかを考えながら、スライド・文章を作ったり、説明の仕方にも抑揚をつけたりと自分なりの工夫をしました。そうして、3分の短いプレゼンから、最終的には10分、12分の長いプレゼンを作りあげることができました。

本番では梨花女子大学、日本女子大学の学生の研究発表も聞くことができました。レセプションでは梨花女子、日本女子、お茶大の親睦が深まっただけでなく、お茶大の学生同士の親睦も深まったと思います。

韓国は日本の大学とは比べ物にならないぐらい規模が大きかったです。また学内に銀行や劇場、映画館などの様々な店があったことは衝撃的でした。

韓国の学生は英語も流暢に話せる人がかなり多かったです。私達も韓国の学生に負けぬよう、もっと真剣に英語を学んでいきたいです。

今回のシンポジウムとその準備を通じて英語能力やプレゼン能力が高まったと思います。この経験を今後活かしていけたらと考えています。

しかしまだまだ、英語を話す能力もプレゼンテーション能力も未熟なので、これから身につけていきたいと思っています。今後英語で研究発表をする機会がありましたら、ぜひ参加したいと思います。そして今回の発表以上に良い発表ができるようにしたいです。

日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 伊澤 亜紀子

所属(Affiliation): 理学専攻情報科学コース (指導教員(supervisor): 瀬々 潤)

発表(Presentation): RNA-seq visualization with compression of uninformative region

今回初めて自分の研究を英語で発表する機会を得た。発表前に、事前に英語の授業に参加し、発表の練習をおこなった。授業では、最初は短い時間から徐々に長く発表をする形式がとられた。決められた時間内での発表は経験したことがあったが、母国語以外の英語での発表は、困難なものだった。例えば、発表者側としては、伝えたいことをなかなか言葉で表現できないこと。聞き手側としては、発表者達の発表がなかなか理解できないことだ。しかし発表練習を繰り返すことで、発表の方法を学び、他の発表者の発表を徐々に理解できるようになっていった。



授業では、英語で質問をし、返答する練習もおこなわれた。私はこの練習が一番難しかった。なぜならば、相手がどのような質問をするかわからないからだ。わからないということは、返答を事前に用意することが難しいということだ。発表者は、その場で返答を考えなければならない。私は知っている単語でなんとか説明しようと努めた。しかし、うまく説明できないこともあった。その場合は、練習後に調べることで、次の発表に役立てた。授業に参加し、英語で相手に伝えることの難しさを感じた。そして上達するためには、反復的な練習の必要性を感じた。私はこの授業を通じて自分の欠点を発見し、学ぶべき部分を見つけることができた。英語の発表のために、この授業は有用なものだった。

事前に英語の授業に参加した後、シンポジウムの本番の地である韓国に向かった。学生の口頭発表では他大学の学生がどのような研究をしているのかを聞くことができた。事前に英語の授業に参加したことがとても役立った。私はシンポジウムのポスター発表に参加した。私は、ただ受け身になってはいけなかったと思った。そうならないために、私は自ら梨花女子大の生徒にしゃべりかけた。緊張しながらしゃべりかけたものの、その学生は丁寧に研究の説明してくれた。途中わからない部分があった。英語の授業で質問する練習をしていたので、このシンポジウム中でも質問をしてみたいという思いがあった。私は英語での質問を試みた。なんとかたどたどしい英語で質問した。すると、なんとか意味が通じたらしく、説明を付け加えてくれた。会話はぎこちないなかったが、梨花女子大の生徒と会話のキャッチボールをおこなうことができた。このとき英語というツールを使うことで、他の国の学生とコミュニケーションをとることができたことにうれしさを感じた。

今回参加したシンポジウムは2泊3日と短い期間だった。しかし、このシンポジウムへの参加は私に貴重な体験をさせてくれた。シンポジウムに参加することで、日本ではできないさまざまな体験をし、そして考えさせられることも度々あった。その主な部分をしめるのは英語力だ。英語力の重要性は、日本にいるときはあまり感じる機会がなかった。しかしシンポジウムに参加することで韓国行き、自らの視野を広げることができた。このことで、英語が使えることの重要性を肌を感じた。私はこの体験を今後に生かしていきたいと思った。この体験を生かすためには、日々の英語の学習が必要だと思った。シンポジウムへの参加で、自分の英語力の向上のためにすべきことを考えた。特に私には単語の知識が足りないと感じた。英単語を知らなければ、会話を始めることもできない。そのため、英単語の知識を増やしたいと思った。シンポジウムではさまざまな経験が得られた。それらを今後に生かしていけるよう努力していきたい。

日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 落合 恵理香

所 属(Affiliation): 理学専攻情報科学コース (指導教員(supervisor): 小林 一郎)

発 表(Presentation): Verbalization of Human Behaviors based on Interaction with Objects in a Particular Space

今回の日韓3女子大学シンポジウムを通して多くのことを学ぶことができた。その中でも最も印象に残ったものを挙げる。

一つ目は、プレゼンテーションをする上で「練習を重ねる」ということが非常に重要であるということだ。

今まで、何度か日本語のプレゼンテーションをしてきたが、母国語での説明は比較的容易であり、悪い意味で「なんとか」なってしまうところがあった。しかし、英語という母国語ではない言語でのプレゼンテーション練習を行うことで、練習しなければ全く話すことができないということを痛感した。また、練習を重ねるごとに、最初に行ったプレゼンテーションよりも良くなっていることを自分でも実感することができた。練習によってここまで変化があるのであれば、今後は国内の発表においても、十分な練習を重ねるべきであると思うようになった。



二つ目は、相手が退屈しないプレゼンテーションの難しさである。

プレゼンテーションの授業を通して、今まで意識したことがなかった、声の強弱、間の取り方、スライドの作り方など、とても新鮮であった。一つのプレゼンテーションを行うのに、こんなにも時間をかけて内容や流れを考えたのは、今回が初めてであった。

「発表」という奥深さを今回の授業を通して最も深く感じることができた。

三つ目は、英語という言語の重要性である。

今回、派遣された場所は韓国であったが、ほとんどの会話を英語で行った。また、梨花女子大学の校外にでると、韓国語でのみの会話になるため、食事をとるのにも英語が通じる場所と通じない場所では意思伝達の上で大きな差が生まれた。派遣先が韓国でなく、欧米諸国など英語圏の環境であった場合、英語を使いこなすことができれば、どの場所に行っても日常生活を普段通りに送ることが可能だということを感じることができた。

最後に、知識は言語の壁を超える、ということだ。

宿舎についての話を聞きとる際は苦労したにもかかわらず、自分の研究についてのポスター発表を行った際は、相手が何を言いたいのかを理解するのが容易に感じた。これは、自分の研究分野の知識があることによるものだと考えられる。相手がどこに疑問を感じて、どのように思ったのかを把握するには、言語が違っていても、背景に知識が存在すれば理解できるのだということ、身をもって知ることができた。

以上が今回の韓国派遣を通して印象に残った点である。

今後は、国内発表・国外発表問わず、学会でのプレゼンテーションには多くの時間を割いて練習していき、世界のどの場所に行っても恥ずかしくないプレゼンテーションを行っていきたいと考える。

また、外国語の勉強も行うべきであると考え。授業内では全てを網羅できるわけではないので、今後、個人的に積み重ねることによって、英語力の向上を図る。

今回学んだことを通して、将来的には、一人の研究者として、国籍問わずコミュニケーションがとれるような人材となっていきたい。

日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 景山 瑞貴

所 属(Affiliation): 理学専攻化学・生物化学コース(指導教員(supervisor): 近藤 敏啓)

発 表(Presentation): Study on Formation Process of Flatly Adsorbed Porphyrin Self-Assembled Monolayers on Au(111) Surfaces

私は今回このシンポジウム参加に応募するにあたって以下の目標を立てました。①英語での口頭発表を経験することで、英語に慣れること、②大学内外での交流を今まで以上に増やすことで自分の視野を広げること、の二つです。

それまでの日本での英語の授業ではリハーサルを含め全部で4回プレゼンテーションをする練習がありましたが、いかに聴衆の人たちに分かりやすく伝えるかということが一番難しかったです。限られた時間内で化学を専門としていない学生にも研究内容を理解してもらうように発表するという事は、非常に悩んだ点の一つです。そのため、絵やセリフの一つひとつに時間をかけ、ユーモアを織り交ぜつつ始終聴衆と人たちが退屈しないようにと丁寧に仕上げていき、少ない期間ではありましたが、大変自分自身への勉強になりました。

また、授業内では普段接する機会がない分野の研究を聴くことができたことは私にとってとても有益なことでした。同じ大学に通いながら、今まで学科以外の研究には全然触れることがなかったので、私にとって他領域の研究を見聞きすることはとても大きな刺激となりました。また、授業を受けるにあたって、毎回どの発表者であっても何か一つでも質問ができるようにという積極的な姿勢で臨みました。今まで授業を消極的に受けてきた私にとっては非常に新鮮でした。始めのうちは、疑問点を持つということ自体私にとっては難しく感じ、さらに英語で質問をするということは大変困難で、伝えたいことがなかなか伝わらないというもどかしさを何度も感じました。しかし授業を重ねるうちに、次第に自然と疑問や質問したい内容が思い浮かぶことができ、意欲的に今回の企画に参加できたと思っています。

そして梨花女子大学において、研究室見学や本番の発表を聴き、各大学の意識の高さに驚きました。また質疑応答のときも英語を流暢に、そしてしっかりと答え研究内容について答える姿を見て、圧倒されたと同時に私自身もいつかあのような姿になりたいと思いました。高い意識を持つ同じような年代の人たちに今回接する機会があったのは、大変良い刺激となり、研究への意欲がさらに湧きました。また、韓国では少ない時間ながらも梨花女子大学の友人ができ、現在でも交流を続けています。海外に友人ができたことは私にとって視野が広がりました。そして、当初の目標を達成できたと考えています。



今回のシンポジウムに参加したことで、私は今後もっとたくさんの事を経験してたくさんの人たちと出会っていきたいと思うようになりました。そして、海外などもっと多くの分野で活躍する女性になりたいと強く感じました。

最後に、日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加するにあたり多くの先生方にお世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 國永 絵美

所 属(Affiliation): ライフサイエンス専攻生命科学コース(指導教員(supervisor): 由良 敬)

発 表(Presentation): Prediction of RNA editing sites of land plant organelles from cDNA sequences

今回、日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加にあたり、公の場での口頭発表を経験したことがなく、また得意ではない英語でのプレゼンテーションに挑むことになりかなり不安を感じましたが、このような経験を学生として体験出来るのは良い機会だと考え応募しました。選考の結果、本シンポジウムへの参加が決まり良い経験が出来ると嬉しく思いましたが、自分に課せられた責務を思うと非常に不安を感じました。英語での口頭発表というこれまでに経験したことのないものにどのように取り組んでいけば良いのか分からなかったので、週に1回総合ライフサイエンス演習という講義を設けて頂いたのは本当に良かったです。2ヶ月半の週1回の演習授業でしたがプレゼンテーションの練習というだけではなく、一緒に参加するメンバーの発表やバックグラウンドを知ることが出来たので良かったです。また、講義での交流を通して、知らない土地で行動する際に必要となるお互いへの信頼関係を築けていたと韓国でのシンポジウム期間に感じました。



今回の口頭発表に向けて数回発表練習を行いました。その間に感じたことは自分の英語能力の低さと、他分野の研究内容を理解することの難しさでした。また、同じ分野でも専門性が高まる程、その内容の理解は難しかったです。そこで、どの分野の人が聞いても、何についての研究なのか、どういうことを行ったのか、そしてその研究から何ができてきたのか分かるプレゼンテーションにしようと心がけました。発表で使用するスライドには極力文章を載せるのを避け、図を豊富にし、原稿も自分の英語能力に見合う簡単な英語を使用しました。また、発表の際はオーディエンスに自分の聞き取りにくい英語を聞いてもらうのだから、出来る限り内容が伝わるよう、ゆっくりはっきりと話すようにしました。

しかし、実際の本番では、映し出された図がズレてしまっていたり、ポインターの電源をきちんと入れていなく図を指し示すことが出来ず序盤に慌ててしまったりとハプニング続きでした。正直に言うと話した内容をほとんど思い出せないです。しかしながら今回、英語での口頭発表を経験したことで、12分間という短い時間にどれだけ準備が必要かということ、その準備が充分になることはないということ、そしてその準備をきっちりと発表のなかで示すことの難しさを思い知りました。また発表に関わる協力者が多い程、研究発表を成功させる責任は大きくなると感じました。したがって、今後研究発表を成功させるために、ハプニングが起きても慌てない精神力を培い、ハプニングをフォロー出来る英語能力のレベルアップを目指して努力していきたいと思いました。

最後になりましたが、今回のシンポジウム参加にあたりご指導ご鞭撻下さいました担当教員である由良教授、英語のプレゼンテーションの練習や作成にあたりご指導下さいました岡村先生に心より感謝の意を表します。また、本シンポジウムと一緒に参加し、英語でのプレゼンテーションを共にやり遂げたお茶の水女子大学の学生の皆様に深く感謝致します。

日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 高島 麻里

所 属(Affiliation): 理学専攻化学・生物化学コース(指導教員(supervisor): 鷹野 景子)

発 表(Presentation): ホスフィン配位子を持つ白金錯体の Br/Me 交換反応に関する量子化学計算

今回韓国のシンポジウムに参加した。英語のポスターを準備するとのことで参加したのだが、事前に英語プレゼンテーションの授業があり、プレゼンテーションが出来るようになるために参加させていただいた。

英語の授業は岡村先生と由良先生が担当され、始めは3分程度のプレゼンテーションだったが、最終的には10分程度のプレゼンテーションをするまでになった。いきなり英語10分話せだと思えば大変だったと思うが、徐々に長くなっていったことで、気がついたら英語のプレゼンテーションが出来るようになった。朝早い授業で、そこは苦勞と感じたが、目覚まし時計と授業へのやる気が私を参加へと掻き立てた。他の方のプレゼンテーションを拝見し、みな頑張っていることがわかったので、刺激された。



そして、いざ韓国へ出発した。研究室を見学させてもらったのだが、人数はお茶大よりは大きい一般的な研究室とあっていいだろう。しかし、壁に飾られた研究室から出た論文の数が多かった。ある研究室は2010の論文が13報もあった。論文一報だすのにも大変な労力がかかるのだが、13報となるとこれはもう驚愕以外の何物でもなかった。施設もお茶の水女子大学よりは大きかった。しかし、私は日本の大学の大きさの平均というものを知らないもので、これが充実した設備かどうかはわからなかった。TEM や SEM や NMR、ここらは標準装備らしい。

私は、韓国の技術力ののびを思い知った。日本はボヤボヤしていると必ず抜かれてしまうと恐怖に思った。日本は、豊かな国だが豊かさに満足し、不況の中で消費しない事が美德である価値観をもった若い世代が台頭するところには本当に大変なことになると思った。そんな私は、今の日常生活に満足し、そこそこの平和とそこそこの幸せ、そんなに物はいらないから自分に合った生活がしたいと思っている時点で、やはり韓国には負け行く運命なのだろうか。そんなことを思いながらの英語プレゼンテーションを聞いていたのであるが、プレゼンテーション能力に関しては2国間に差は見られなかった。ここはホッとした。

今回のシンポジウムを通して学んだことだが、シンポジウムに向けた研究のやり方を学んだ。研究データを時間通りに出していくこと、時間に追われながらも主体的な研究を行っていくこと。これらを学んだと思う。今回は英語のポスター発表であったが、特に英語だからすごく苦勞したということはない。今後英語で何か取り組む時も気負わず挑戦できそうである。抱負として、海外の研究室を見て、研究の成果を論文としてまとめ形にしたいと思うようになったと思うような気がする。

もし、次にこのような機会があつてやろうかどうか迷っている人がいたならば、私は参加することを勧める。授業としてコツコツとプレゼンテーション能力をあげていく機会は滅多になく、皆が韓国に向けて努力するという一体感が生まれるからだ。

日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 三木 香央理

所 属(Affiliation): 理学専攻情報科学コース1年 (指導教員(supervisor): 小口 正人)

発 表(Presentation): Kernel Monitor of Transport Layer Developed
for Android Terminals

今回、英語で発表する初めての機会と韓国の女子大の方々と接する機会を得ることができて非常に意義でした。中でも印象に残ったことはEWHA女子大学の学生や教員の意識やレベルの高さ、EWHA女子大学の施設の素晴らしさを肌で感じる点ができました。



プレゼン発表でもポスター発表にしてもEWHAの学生は皆さんとても英語が堪能で驚くばかりでした。また、ポスター発表のときにEWHAの学生さんに学年や年齢を聞くと、学部は3年生や4年生でした。短期間に素晴らしい研究をし、それを流暢な英語で発表し、私たちも頑張らなければいけない、と良い刺激を受けました。私はまだ3年生のときは研究などしたこともなければ、もちろん発表もしていませんでした。大学の方針からも、優秀な生徒を育てるカリキュラムが組まれているのだと思いました。また、他の大学を出てからEWHAに入学しているという学生さんとも話をしました。韓国の学生にとってもEWHAがいかに魅力的で優秀な大学かということがわかりました。EWHAの学生さんと日々の勉強量や研究量の話もして、皆さん普段から大変勤勉に頑張っていて、そのために素晴らしい研究ができるのだと改めて実感しました。私も負けてはいられません。

また、施設や設備がとてもきれいでさすが私立大学だ、と思いましたが、そのくらい皆さんの学力も高く、勤勉で当然のように感じる点がEWHAならではの、ではないかと思います。お茶の水女子大学にもEWHAのような素晴らしい施設があればいいのに、と感じました。

私は今回の日韓3女子大学合同シンポジウムを通して、英語のプレゼンができるようになったことはもちろん、それ以外にも韓国の学生のレベルの高さに刺激を受け、今後、研究に語学にもっと力を入れようと思いました。EWHAは今後の社会を背負っていくことのできる意識と学力の高い学生を育てています。オープニングセレモニーで見た映像からも女性の教育やグローバルな観点からの教育に力を入れていることが感じられました。お茶の水女子大学も女性を育てることに力を入れているので、自分の意識を高く保ち、韓国に負けぬように、社会を背負っていける女性になりたい、と強く思いました。また、たった3日間という短い訪問の中でこれだけ刺激を受けたため、もし可能であれば、EWHAに留学してもっともっと刺激をもらいたいと感じました。私は早く就職したいという気持ちが強かったのですが、EWHAの学生さんを見ていると自分は勉強不足だと思い、まだまだ学びたい意欲が沸いてきました。例えば1年の留学だとしても得られるものは今後の人生においてかけがえのないものになると思います。井戸の中の蛙では自分のモチベーションも下がってしまうので、これを機にもっともっと色々なことに挑戦したい、と感じました。

他にも韓国、特に今回訪問したソウルはとても近代的で、日本よりも街中がIT化しているような印象を受けました。街中、スマートフォンユーザで溢れていたり、駅の券売機のシステムがユーザインタフェースに優れていたりしたからです。EWHAの学生から得た刺激や韓国の近代化している街並みをみて、日本も頑張るべきだと強く思いました。また、お茶の水女子大学も国や民間の企業からもっともっと支援して頂けるような、大学になれば良いなと感じました。そのためにも、まずはお茶の水女子大学の一生徒として、お茶の水女子大学の名を名乗るのに相応しい学生を目指し日々努力しようと決心しました。今回はこのような素晴らしい機会を与えてくださり、本当にありがとうございました。感謝しています。

日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 山田 恵

所 属(Affiliation): 理学専攻情報科学コース (指導教員(supervisor): 瀬々 潤)

発 表(Presentation): Subspace Clustering Method for Gene Expression Analysis with Protein Interaction Data

2010年12月21日から23日の三日間、私は日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加しました。シンポジウム参加の前に、英語プレゼンテーションの講義、アブスト文書作成、リハーサル発表会があり、ただ海外での学外発表をするだけとは異なる、長期的に英語力を訓練する素晴らしい機会になったと考えています。

英語プレゼンテーションの講義では、自己紹介といった簡単な練習から、研究発表を、三分間、十分間でと段階を踏んで長く話すことができるように行い、無理なく、英語で物事を説明する練習になりました。また他の人の研究発表に対し英語で質疑応答をすることも、聞くこと、疑問を持つこと、疑問を英語で表現すること、疑問に対し簡単に答えることの練習になった点で大変効果的だったと思います。全く専門の異なる分野の発表を聞く機会はあまりなく、初めはさっぱり分からなかった研究内容も繰り返し聞くことで曖昧ながら分かるようになったことも段階を踏んで発表練習を行った成果のひとつでした。また、自分の発表に対しての他の人の反応を講義内で探ることができることで、専門分野が異なっても自らの研究の面白い部分が分かってもらえるように発表を工夫したい、しようという気持ちを、正に実感して得られました。また、講義開始時にリハーサル発表会では12分で研究発表を行う予定だと伺ったとき、その時の英語力ではかなり難しいだろうと感じていましたし、実際に決して簡単なものではありませんでしたが、講義を受講した結果、無事発表することができました。シンポジウムそのものだけでなく、事前の準備段階で乗り越えたものからは、英語力はまだまだ学術的な実用にはほど遠いものの、たどたどしくも英語を用いて自分の研究を説明出来たという経験と自負が得られました。

シンポジウムは、韓国の梨花女子大学で行われ、大学の寮に滞在させていただきました。二日目の口頭発表では、二部屋のパラレルセッションで、韓国側と日本側の学生が交互に発表を行いました。反省点としては、今回は情報系の研究発表はされておらず、分野外で内容が掴み辛かったことを差し引いても、一度でも質問が出来れば良かったです。夜のバンケットでは、梨花女子大学の学生の方と英語でお話することができました。簡単な質問はできても、答えることや気の利いた相槌をうつことは困難でした。しかし下手な英語なりに、英語、ましてや韓国語、日本語では全く意思疎通できない方とお話出来るという事実が面白く、内容も同年代らしいお話ができ楽しい時間を過ごすことができました。梨花女子大学はミッション系大学ということもありツリーやリースが大学内各所に飾られているのを「羨ましいな」とお話ししたら、笑われてしまったことが印象に残っています。三日目のポスター発表は、フェルトが表面に板張りされたような仕切り盤が用意され、シールのようなマジックテープをポスターの後ろに貼って、板に貼付けて行いました。日本の学会では大抵は押しピンで刺しとめることが多いと思いますが、目新しい形式だったのが関心深かったです。

韓国へ派遣されて特に印象に残ったことは、二日目のバンケットにいらしていた、お話しした方とは別の学生の方と三日目に大学内ツアーのガイドをしてくださった方が大変流暢な日本語を話されていたこと、梨花女子大学内のコンビニの店員男性が「何かお手伝いしましょうか」と日本語でお声掛けくださったことがあります。こちらは、韓国語については、ハングル文字は記号のように見え、漢語も地図で同じ地名かを識別できる程度にしか分からず、アクセントが合っているかも曖昧な「カムサハムニダ(ありがとう)」しか返せないのに、今回出会った韓国の方たちが、彼らに取っては外国語である日本語に精通していることが大変印象的で、同時に自らの海外への無関心さを実感し、英語が苦手な原因はここにもあると思い至りました。シンポジウムが終わり、英語プレゼンテーションの講義は終わりましたが、英語を使う訓練は、ニュース記事を読み、講義やその他の活動を通じ続けていきます。

日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 吉田 悦子

所 属(Affiliation): 理学専攻化学・生物化学コース (指導教員(supervisor): 棚谷 綾)

発 表(Presentation): Conformational Property of Aromatic Amides and Ureas Bearing Bipyridyl Groups

海外で英語のプレゼンテーションをすることは自分にとっていい機会だと思い、今回応募しました。まず、シンポジウムの訓練としてあった約3ヶ月間の英語スピーチの授業を通して学んだことは、英語のプレゼンテーションをするにあたり、きれいな英語を使い、正しい文法で話すことは大事だけれど、それよりも大切なのは、簡単な単語の羅列でいいから、相手に自分の言いたいことを伝える努力をすることだということです。英語ができないから英語でのスピーチやディスカッションができないと諦めることはないのだと知りました。また授業に参加すること



で、初めは英語にも人前でスピーチすることにも強い苦手意識がありましたが、うまくこなせるかは別として、英語でのプレゼンテーションも数をこなすうちに慣れ、積極的に他の人のプレゼンテーションを聞くことで、このようにしたら聞きやすい、またはわかりやすいなどと自分のプレゼンテーションの参考にすることができました。授業を受講する前と後とでは、英語を使ったプレゼンテーションに対する意識が大きく変わった気がします。また、短い時間で自分の研究テーマを異分野の人に伝える試みは、自分の研究を見直すきっかけになりました。実際に韓国に行き、シンポジウムに参加して一番印象的だったのは、韓国の学生によるラボツアーでした。生物、物理、化学の3種のツアーから自分で選択でき、私は自分の専攻である化学のツアーに参加しました。内容は、化学専攻の学生が化学科の研究室と装置を案内しながら説明してくれるという簡単なものだったのですが、そこで感じたのは韓国の学生と日本の学生の研究に対する気迫の違いでした。最近の日本の学生は勉学に対して積極的でないといわれるのも納得できました。これは、プレゼンテーションを聞いているだけでは感じることはできなかったことなので、シンポジウムとは、ただプレゼンテーションを行い聞くだけが全てではなく、他のイベントや遊びからも学ぶことが多くあるのだと強く感じました。同年代の自分と同じように研究をしている学生は世界中に存在しているが、その環境や研究に対する姿勢はそれぞれ異なる。その1つを垣間見られたことは、今回のシンポジウムに参加してよかったと思えた1つの要因です。またシンポジウム本番では、やはり韓国の学生との語学力の差を見せつけられました。自分の英語レベルの低さを恥ずかしく思わずにはいられなかったのが、今後の努力が必要だと改めて感じるいい機会になったと思います。また、韓国の学生には日本語が喋れる人も多く、仲良くなった学生が日本語を半年しか勉強していないと言っていたことには驚きました。今後、在学中に、または社会に出た後でも、このような機会があるのならば、英語ができない、プレゼンテーションが苦手だと臆せず、日本以外を知り刺激を受けるいい機会なので参加したいと思うし、そこで経験したことをもとに、いろいろな考えがあることを意識して研究や仕事にいかしたいと思いました。